

【その三十一】野戦病院に通う日々

オマケとハンは、意外なのか当然なのか、実に抱卵・育雛が巧みだった。さすがヘイスケの血を受け継いでいるといえる。一つしか残さなかった有精卵（あとは擬卵）をいとも簡単に孵化させた。おそらく生まれたのは二〇〇二年十二月二十四―二十五日の深夜だ。その一粒種を、子育て経験もないのに、完璧に成長させてくれた。鳴き声がないので心配したこともあったが、ヒナが飢える間もなくエサを与えていたようだ。

約二週間後、両親からヒナを引き取り、考えられる万全な体制で餌づけをおこない、ヒナもすくすくと成長してくれた。誕生日が聖夜なので、名前は『セーヤ』とする。

二〇〇三年の一、二月、セーヤは何の問題もなく、甘やかされて育っていった。すべては順調だったが、三月以降連続で不幸が押し寄せてきた。二代目のチビが急死、三代目クルが骨折、六代目の母ハンの腫瘍発覚、三代目クルの夫サム之急死、そしてハンの死とつづく。



生後一ヶ月のセーヤ

初代ヘイスケが亡くなった時に、十数羽もいて平均寿命が七年程度なら、年に二、二回の別れは必然となると心していたものの、まさかこのように早くまとめ払いがやってくると思っていなかった。御被いしても文鳥に効果があるとは思えないの

で、適当に哀悼歌でもつくっておこう。

あしひきの 人は我が身に なみだする

君鳥ならば ただ飛びてゆけ

三月十日のチビの場合は、予感があった。前日の夜は普通に遊んでいたし、血色も良かったが、何となくさしせまっている気がしたのだ。客観的な症状はなかったにもかかわらず、何となく全体の様子から、

夏を乗り越えられるかな。

と、なぜか考えていたのだ。そのため、翌日にカゴの隅で冷たくなっているのを見た時は、不思議に納得のいくものがあった。

やはり産卵で身体が衰弱していたのではないかと思う。

悲しむ間もなく同月、クルが脚を引きずっているのを発見。引きずるところか、ジタバタと這って歩いている。動物病院に行くしかないが、数年前ガツがへビにかじられ負傷した時、お世話になった鳥類専門（正確に言えば小型哺乳類も診るようだが）の動物病院は、電車で数駅先に移転していた。行けない距離でもないが、そこまでして行くほどの価値を感じない。

徒歩三〇分少々場所に、小鳥もしっかり治療してくれるとの情報がある動物病院が二軒。特に飼鳥者の評判が良いらしい一軒の住所を見ると、以前クルの兄弟にあたるヒナたち（チビとブレイの子供）を引き取ってもらった小鳥屋さんのある商店街の近くだ。つまり私の生活圈と言える。しかし、そのような動物病院を見た記憶がない。生活圈のことを知らないのはシャクなので、その動物病院に行くことにした。

結局、良く知っているペットショップの並び、ドックフード屋さんの裏手にその動物病院は存在していた。何度も前の通りを歩いているが、その存在に気がつかなかった。それくらい見落とす場所なのだ。第一、有名にしてはすいぶんせまい。前の鳥類専門をつたう病院も広くはなかったが、さらに極端だ。待合いは三人入ればいっぱいになる。お世辞にも清潔には見えない。消毒はされているのだが、壁紙などはすすけているのだ。しかし、個人的にこういった雰囲気は嫌いではない。何やら清潔めいちゃれた待合いがあるほうが、よほどうさんくさいと思う。

ぼそぼそ話す口ひげの獣医さんが鳥類専門で、触診から骨折していると診断、



骨折したクル（右）をかばう夫のサム（左）

手際よくギブスをはめていただいた。脚の治療だけして余計なことは何も言わない。すばらしい。何かといえは飼育者を叱って悦に入っているようなタイプではない。ここをかかりつけにしようとする。

その後、薬を飲ませつつバリアフリーな生活を送ったクルは、約一週間でギブスは

とれ、一ヶ月後には普通に動き回るようになった（夫のサムは邪魔にならないのでこの間も同居していた）。

クルは大事にはいならず、ほっとしたのもつかの間、同月末にはハンの下腹部に腫れを発見する。思えば、この時点で病院につれていけば良かったのだが、諸般の事情（夫のオマケと別居させるのを避けたいのと、私が忙しかった）でしばらく様子を見ることにした。特に調子が悪い様子もなく、腫れが大きくなるようでもないで、自然治癒するのを期待していたのだ。ところが、四月末には体調が悪化、五月の始めに先の動物病院へ連れていくことになった。

卵管炎というものではないかと素人考えしていたが、腫れの原因を特定しかねた口ひげの獣医さんは、検査的に切開したいという趣旨を遠回りに言っている。検査的とはいえ、小鳥の切開は重大だ。嫌がる飼育者も多いため、歯切れが悪いように思われた。特に止める理由がないのでお願いする。

小一時間ほどの手術で、近在の犬猫鳥の長蛇の列が出来上がるのを待合いで見ながら、行列の張本人として罪悪感に包まれていた。小鳥の手術で待たされることに、犬猫の飼育者などには、割り切れない気持ちの人もいるに相違ない。

しかし犬猫病院は腐るほどあるので、ここにこだわるのは料金が安いという

理由が大きいのではないか。では、少しくらい待っても良いだろう。

などと、毛並みの悪い犬を横目に考えてみる（下町地区の犬猫なのだ）。安くて腕が良いので行列となる。安くなくても来る人も、安いから来る人も集まるわけだ。このあたりの良し悪しは、単純にはいかない。

結局、診断は腫瘍ということであった。その後、ハンの闘病は続くことになる。

ハンの腫瘍が大きくなり身体がやせ細り、今にも消え入りそうで毎日気をもんでいた七月四日、思わぬ事態が起こった。私が風呂に入っていると、文鳥たちが騒がしい。しばらく湯船で様子をうかがったが、断続的な騒ぎが続いている。これは数年ぶりのハビの襲来ではないか、あわてて様子を見に行くと、サムがカゴの隅でもがいている。啞然としてすぐにカゴから取り出したが、痙攣してこと切れてしまった。

テンカンの症状をみせる文鳥がいるというが、その場合は自然に回復するので触らずに放っておくのが良いという。以前衰弱していたクロが、手の上から発作を起こして滑り落ち、拾い上げた時には亡くなっていたのは心臓発作だろう。死んでしまったサムも心臓発作だろうか。

何年もかかって、ようやく我が家の生活にも慣れ、体格も良くなってきたところだったが、あまり好きではなかったはずの人間の手のひらの中でこと切れるとは、皮肉な話であった。

一方七月はじめのハンは、獣医さんも「痩せてしまった」とあきらめ、延命のリンゲル液を処方する（ようするに栄養を与える他に手だてがない）状態となっていた。リンゲルに以前から処方されていたメシマコフ（漢方の桑黄、抗癌作用があるとされている、獣医さんはこれをリンゲルに混ぜて与えるように言っていた）、ついでに知人から紹介されたスピルリナ（藍藻の乾燥粉末、ビタミンAと食物繊維が豊富で抗酸化作用などがあるという）や、鳥用乳酸菌を加えた混合液を、腫瘍の薬とは別に一日数滴点滴することにした。

獣医さんの処方でないものも混ぜるには、いちおう理屈があった。ハンの状態が一番恐ろしいのは、癌に圧迫されての糞つまり。有り難いことにハンは食欲旺盛だったが、青菜は食べない（エネルギーにならないので食べている余裕はなかったようだ）。そこでスピルリナで食物繊維を摂らせたほうが便通はよいはず、乳酸菌も便通の助けになるだろう。しかし理屈よりも、打つ手のなくなった状態



7月末日のハン（奥）と付きそうオマケ（前）

では、何でもありというのが本音だ。その混合液が功を奏したのかわからないが、ハンは一時だいぶ調子を取り戻した。

ところが八月となると腫瘍の膨張が一段と進み、衰弱、再び危篤となった。八日夜の放鳥時、ハンはいつものようにビスケットをしがみつくようにして食べ、ひたすら手の中で眠っている

（ビスケットはカロリーが高いのでいくら食べても腫瘍に栄養をとられてしまうハンには必要であつたようだ・・・それでも痩せてしまう）。カゴに帰すと、開閉口に体を寄せ付けて出てきたそうにする。そんなことは今までしなかった。夜中に見に行くと、つば巢の中でそわそわしている。九日早朝見に行くと、つば巢の中で背中にクチバシをつける姿勢をとり眠っている。生きていることにとりあえず安堵し、七時になってから薬を点滴するため、下段のつば巢で丸くなっていたハンを取り出す。死期が差し迫っていることは明らかだった。点滴を吸うのも弱々しい。つば巢に戻そうとするが見向きもしない。その時、昨晚から手のひらを待っていたのだと私は悟った。

手のひらのなかで眠っている。鼓動は何とも弱々しく、ザワザワとした雑音に過ぎない。尻尾をあげて糞をしよつとすることが出来ないようだ。見れば、お尻の穴が糞でふさがっている。取り除いてやると、下痢便が出た。そのまま手の中でウトウトと眠り続けていたが、一時間ほどたつとまた尻尾をあげる。糞は出ない。そのうち、クチバシを上下に鳴らしながら呼吸し始めた。苦しいだろうといったたまれなくなるが、何も出来ない。

八時十分頃、ハンは首をあげて目を大きく見開いている。一所懸命気張っているように思えた。十分頑張った、ほめてやるしかない。ほおを指でなげ、ゆっくり眠るようにながす。その時に何か抜けていく感じがしたが、首をおろしても目は開いたまま。そのようには見えなかったが、呼吸は停止していたのだった。健康が一番だ。今度の動物病院は大変気に入っているが、当分お世話になる事態は起きて欲しくないと思った。

【その三十二】婿候補はイチ・クン・パー

二〇〇三年の前半は、ただ不幸な事態に身をゆだねていただけでもなかった。そもそも飼い主の私に黙々としていた気持ちがあっても、我が家の文鳥社会はそれを許してはくれなかった。

二〇〇三年春には、ゴンとケイはわりに仲良くしていた。妻帯者のガブに色目を使っていたゴンはそれをやめ、ケイを夫と見なし始めているようだった。この調子で行けば、予定どおり秋には二世の誕生が見込まれ、私は大いにそれを期待していた。この二羽が両親なら、見栄えは相当良くなるに相違ない。そんなことを考えていると、思わぬ邪魔がはいった。六代目のセーヤだ。

セーヤはなぜかヒナ毛の段階からケイのことが気に入り、つけまわし、ケイもセーヤの前ではだらしない府抜けた様子になってしまっていた。セーヤが一〇〇円鏡をくるくる回したり、部屋の隅に設置したプランコをとんでもない勢いで乗り回したりするのを、ついに行って恐れ入った様子で見ている。確かに普通の文鳥はやらない、もしくはやれない技なので、尊敬するのも無理はないのだが……。ヒナ換羽を終わりメスとほぼ確定したセーヤは、もう妻気取りでケイの羽繕いなどしている。はすっぱ姫君は早熟だったのだ。

五月、クルの骨折騒動に続き、ハンの発病でかなり憂鬱な気分となっていた私は、それでもややこしいことになる前に手を打つことを考え始める。長じるに従い、セーヤは父親のオマケに外見も性格もそっくりとなっていたから（人をつついたりするところまで）、将来ケイ以外の婿を連れてきても、相手にしないことが、ほとんど確実なこととして予想された。オマケは、嫁として指定されたセーユを徹底的に邪険にあつかい、ゴマ塩三姉妹だけを追いかけ、ついに本命のハン

と夫婦となった。一卵性父娘の、娘のほつが同じようにしないわけがないではないか。

それならセーヤのぞみどおりケイと夫婦にして、ゴンには別に婿を迎えればよい。しかし、なるべく文鳥の数を抑制したい気持ちもある。

セーヤには横恋慕させておけばよい。……いや、それではゴンとケイの抱卵に邪魔となるに違いない。そもそも新しい婿がゴンと仲良くなるかわからないではないか。……しかしそれは毎度のことだ。

などと、他人には理解不能な葛藤をしながら、とりあえず、気に入ったオスに出会ったら買うことに自分の意見を集約する。……と、そのように自分自身に言い聞かせた時は、私の場合すでに婿を迎えることに決まっていたのだ。暇を見つけてはペットショップをのぞくことになる。

そして五月下旬のある日、立ち寄った（本当はわざわざ帰宅の際に遠回りをしている）大型ペットショップ。この手の店は避けたいし、あまり期待もしていなかったが、オスの桜文鳥が売られていた。二羽いる中の一羽は、頭に少々白羽が見られるものの、クチバシの短く太いところは私の好みの文鳥に見えた（私の好みは幅が広い）。色つやも体格も合格点。いかにも若そうな様子だ。もう一羽には無い胸のぼかしが、こちらにはある。見ているとすぐにさえずりだした。これを買わずにどうしよう！

店員さんと呼ぶ。ついでに非常に小さな鳥カゴも買うことにして、そこに入れてくれるように言う。運搬に使った後、小さな鳥カゴはハンの通院に使えると考えたのだ。ところが女性の店員さんは、ボール紙の箱に入れることに固執する。その主張は、「今日は寒いし」「室内と気温差があるし」「まだ若い鳥だし」……、といったものであった。五月の下旬、外気温も二〇度はある。これでどうかなってしまふ文鳥などいたら面白い。私はいらだちを抑えていたが（早く家に帰ってハンの投薬をしたいのだ）、ペットヒーターが必要だとまで言っている人物と議論しても無意味だ。好きにしてもらおう（鳥カゴの中に文鳥のはいったボール紙の箱を入れるという……意味がない……）。

鳥の羽毛というのは保温のためにあることくらい、動物管理士か何かの資格で習わないのだろうか。きつと、アフリカ直輸入の鳥とみんな一緒だと思っているのだろう。善意には違いないが、こういう人の知っている飼育というのは、所詮

ペットショップのものでしかないのだ。内心舌打ちしながら、鳥カゴを組み立ててくれるのを見ていた。

これにしても、出来上がって展示されているのがすでにあり、値札も付いていないから、それをそのまま売ってしまったえば客を待たせることはない。展示用は、後でまた組み立てれば良いではないか……。

などとさらに皮肉な気分のみたされていたら、店員さんは手に消毒液をスプレーしてからその桜文鳥を取りだし、目がどうだ、鼻がどうだと、いちいちチェックをはじめた。さらにこの親切にもこちらに確認を求める。いかにも面倒だが、黙っているの先に進まなそうなので、「はい」「はい」適当に相づちを打つ。箱に文鳥をしまい、体重をはかり、二十七と確認する。そして『健康状態チェックリスト』および『販売確認書』なる各一枚のペラ紙をこちらに示し、チェック項目に今一度確認を求め、生体の交換は出来ない旨を告げてくる。いろいろな客がいるから、これも必要なプロセスなのだろう。さらに何か変調を起こした時のために、ある動物病院を紹介したペラ紙も渡された。

この病院と関係あるから、口数がやたらと多くなるんだな。

と以前長々とエサなどについて、頼みもしない能書きを言っていた獣医さんを思い出した。もちろんそのようなことは口に出さず、会計。

レジに向かい、前の客の会計を待ちながら、商売人は商売、医者には治療をするのが先で、能書きをタラタラするのは、よほど後に回したら良いなどと考えていた。いろいろと感想が頭に浮かぶ。

能書きは、それを聞きたい人にだけやれば十分だろう。ましてその能書きが、聞きたくもない人に聞かせるほど、たいそうなものでは無ければ、なおさらである。

生体の販売トラブルは問題となっているけれど、数千円の文鳥の場合は、病気だろうが何だろうが、買ったら自分の文鳥として（オスメスの間違い以外）最期まで責任を持つしかないのではなからうか。

このお店の対応は飼育初心者には素晴らしいものだが、ある程度の飼育経験者が、ペットショップの店員程度の者にわかる程度の異常を見逃すほうが珍しい。

この店員さんはまじめで好印象な人物だが、個人やお店の志がどうであれ、彼らが持っているのは、本来はペットショップ内部における商売用の「もの」管



理のノウハウでしかあり得ない）同じ店でも売り上げが悪ければ途端に飼育環境は劣化する。また店長が変わってもまるく変ってしまう。善意だけではどうにもならないのが、チェーン店というものだと思う。

会計四〇〇〇円ちょっと。・・・何で？桜文鳥オス三四八〇円（三七八〇円だったかも）と書いてあったではないか。鳥カゴは確か一九〇〇円だった。そこで六〇〇〇円払おうと財布から出して待っていた私は正直驚き、不思議な様子で、

「鳥カゴもあるのに？」

とつぶやいてみる。「そうですよ」と言いながら・・・店員さんは不安になったのが確認しに行った。そして・・・それで良いと言いつ。本当に一九八〇円らしい。いくら何でも安すぎる。ヒナの値段と間違っているのか、買った文鳥だけに脚輪があったので、何か安値に理由があるのか（手乗りヒナの売れ残りとか）。しかし、客の方が何度も支払いを高くしようとするのも妙な話なので、請求されただけ支払い帰宅する。

『センター北』がそのペットショップの最寄り駅なので、『キタ』と名付ける。  
「イチ・クン・パー（一九八〇）」ではかわいそうに思ったのだ。



初顔合わせのセーヤにいじめられるキタ（右）

キタはよくよく見ると妙な顔をしている。頭の上方の黒い部分の面積がせまく、頬の白い部分が広いので、顔が大きく見えるのだ。さえずりは、何とも表現しにくいけたたましい音響。非手乗りなので、人間にすり寄ってきたりはしないのは良いが、困った点は、運動神経がないのにパワーだけはあるところだ。キタの

飛翔はやみくもに直進するだけで、飛びながら方向を変えたりすることが出来ない。つまりすぐに何かと衝突して落下する。以前フクが激突死した経験があるので、その再現が恐ろしい。風切り羽をかなり間引く。スピードが出なければ、衝撃はすくなくなるはずだ。

スピードが出ないのだから、少し考えながら飛べば良いものを、少し慣れてきたキタはひたすら羽ばたき、家具の裏などに落下する。慣れた油断で、かえって目測を誤るのだ。何度も、

「あいつは頭の中がイチ・クン・パーのくるくるパーだ！」

とのしり、ついに風切り羽をすべて切ることにした。・・・ところが、まだ飛んでいる。ある種の天才かも知れない。

すぐにゴンと同居させた。いちおう正常なオスなので、同居のメスにはすぐに興味を持った。ところがゴンのほうは完全無視。ケンカもしないが仲良くもしない。まるで空気と見なしている。今後夫婦になれるのか、見守るしかない。

一方、強奪愛に成功したかたちのセーヤは、ケイとの同居に喜んだ。ところが、喜びすぎてかまい過ぎるものだから、ケイの体調がおかしくなる。何しろケイが眠らうとしているのに、しつこく毛繕いするし、さえすりの練習を始めると体を寄せ付けて、結果として邪魔をする。ケイにしてみれば、自分の時間がもてない。練習できないさえずりは、かすれ声で、調子の整わないものになっていく。そのような干渉は、実力で排除すればよいのだが、なぜかケイがセーヤを叱ることはない。愛妻だからではない。何しろ、セーヤに対してだけはさえすらないのだ。そもそもメスとは認識していないらしい。不思議な関係だ。

重大な事態となる前に別居させ、ケイの体調が正常になるのを待つことにする。秋の繁殖期に向けて、前途多難を予感させる夏なのだった。

### 【その三十三】さよならの夏とはじまりの秋

二〇〇三年の夏というのは、前年よりはじまった不幸の連続に、サムとハンの死というこれ以上ないくらいのだめ押しをやっていったと思っていたが、迷惑なことに最後のとどめも忘れなかった。

八月二十八日朝、六代目セーヤのお気に入り、七代目の父となるはずのケイがつば巢の中で冷たくなっていった。それこそ眠っているようにしか思えない姿だった。

我が家に来た当初は非常に澁刺としていたが、なぜかセーヤと同居するようになるとおとなしくなり、あわてて別居させたが、八月になると軽い運動でも動悸するまで虚弱化していた。それでも食欲はあり、フンに異常もなく、お腹を見ても内臓肥大の様子もないので、どのように考えて良いものか困っていた。精神的なものなら、巢作りなどをはじめめるうちに自信が回復するかもしれない。そんな甘い期待を抱いていたのだが、残念な結果に落胆と失望を味あわされる。

予想外の展開に痛恨の思いに満たされ、かつ、続く葬列の長さに鬱々となりながらも、えり好みの激しいお姫様であるセーヤのお眼鏡にかなうオス文鳥を探すという、難題に取り組まなければならなくなった。

何しろケイの姿が見えなくなると、セーヤは祖父の祖父にあたるブレイにすり寄り始めたのだ。ブレイは若い女の子につきまとわれ大喜びの様子だが、この恋愛関係を許すわけにはいかない。繁殖シーズンを目前にしたこの危機に、結局、またもペットシヨップ巡りをはじめることになった。

かくして、暇さえあれば行脚すること十五軒。なかなか眼鏡にかなう文鳥の発見にはいたらない。セーヤは、色のはっきりした桜文鳥が好みのようで（父のオマケの例で考えると、かなり好みはうるさいものと思われる）、死んでしまったケイに似ていると申し分ないのだが、毎度のことながら探しはじめると見当たらないものなのだ。白羽が多かったり、なかなか良いと思うとメスだったりする……。

九月中旬、久々に鎌倉に遠征する。実際は小一時間で行けるので、遠征と言えるほどのものではないが、とにかく鎌倉駅に降り立つと、ペットシヨップに行く前に段葛（参詣路）を通って鶴岡八幡宮に参拝する。普段なら、鎌倉に来ても八幡宮は素通りしてしまう。しかし、昨年来の不幸やこのたびの文鳥の婿さがしを思えば、この際、神様仏様八幡様にも泣きつきたいところだ。

参拝後、鎌倉駅にとって返し、江ノ電口側の近くのペットシヨップに行く。するとそこには、信じがたいほど思い描いたとおりの文鳥が待っていた。ケイに似ていて、それより目が大きく、アイリングが赤く色の濃い桜文鳥！ペアで九八

〇〇円と書いてある。どちらがオスで、どちらかメスか、と言われたら、体格などから明らかに一目惚れしたほうがオスだ。

「嗚呼、神よ！八幡大菩薩様、感謝致します！」

と不信心者も、思わず拝まじにはいられない。

オスだけ売ってくれるように店員に言う。大型インコの世話をしていた店員のおばさんは、オスだけで売って良いのか、責任者の別のおばさんに聞きに行く。売って良いに決まっている。こちらはオスだけで九八〇〇円でも買うのだ。商人というのは、値段が見合えば、何だって売らなくてはならない立場なのだ。

責任者らしいおばさんが出てきて、文鳥はカップリングが難しいとか、相性でも返品は出来ないとか、言っていたようだが、そんなことは百も承知しているのだ。右の耳から左の耳へ適当に生返事する（最近ペットショップの店員と話をする気力が全くななくなっている）。

明らかに、黙ってさっさと売れという態度を、前面に押し出す客に対して、提示された値段は九八〇〇円の半額の四九〇〇円だった。文鳥の場合、オスとメスが等価ということは普通あり得ないが、ヘアで売るといっているものを片方だけ買うのだから、とりあえず妥当なところだろう。ヘアでないと売らないなどと言ったら、その非を改めてもらわねばなるまいとは考えても、値段について文句を言う気はないので、即刻承知して会計する。



ひと目でクラ（右）を気に入ったセーヤ（左）

当然、八幡様にお礼参りなどせずに、飛ぶようにして帰宅する。鎌倉で買ってきたので、『クラ』と名づける。「カマ」ちゃん、婿の名前としては不適當だからだ。クラは容姿も良く、ケイにも似た顔立ちなので、これでセーヤが気に入らないわけ

がない。結果は、案の定というより予想以上だった。夜の放鳥時間に一目クラを見たセーヤは、初めての環境にとまどっているクラに積極的に接近し、寄り添い、秒殺で口説き落とした。

「この前キタをはじめて見た時は、こづき倒したくせに……。」  
あくまでビジュアル重視のセーヤは、オスを手なづける点では天才のようだ。我が娘ながら、何ともたくましい。

数日後には、セーヤとクラを同居させる。ケイが同居後、セーヤに元気を吸い取られたようになった前例があるので、気がかりだったが、クラはケイほどセーヤに従順ではなく、エサ場を譲らなかつたり適当に対等に接している様子だった。じゃじゃ馬姫君と付き合うには、ある程度強さがないと身が持たないだろう。その点も安心できそうな婿殿だ。

#### 【その三十四】交叉する新旧の生命

二〇〇三年十月となると、まだ若いから産卵は早いと心配する飼い主の気持ちなど、まったく無視して、六代目のセーヤはさつさと産卵をはじめ、初卵の時こそ少し苦しげだったが、教科書どおりの規則正しさで産んでいった。

しかし抱卵のほうは教科書どおりには始めなかった。五個産んでも抱卵しないで、これはやはりまだ幼くて自覚が足りないのだろうと私は考えた。仕方がないことだと納得しながら視線を移すと、マセとガツの姉妹が一所懸命巣こもりしている姿が目に入った。というより、箱巢の前でガツがこちらを威嚇しているのだ。

ちょうどセーヤと同じ時期に産卵を始めていたこの姉妹、いまだ子育て経験はない。いつも擬卵を相手に無駄な努力をしているのも、かわいそうな気がした。そこでセーヤの卵を一つ移して、仮母をさせる気になる。うまくいっても、うまくいかなくても、それはどちらでも良いだろう。

ところが翌日、六個目を産卵したセーヤは、一転巣こもりを始めた。あのお転婆の遊び好きが放鳥時間も出てこないのだから、私はビックリしながら感動する。やはり子育て上手の遺伝子は、しっかり受け継がれていたようだ。

七代目誕生も、案外たやすいかもしれないと思い始めた頃、二代目の婿で最長

老のブレイの背中が微妙に盛り上がっているのに気づく。よく見ると、首筋に赤く腫瘍状のできものがある。

ショックを受けながら考えた。さてどうしよう。ブレイは一九九七年六月に我が家にやってきたが、その時一歳以上で、おそらく初代のヘイスケと同期生ではないかと想定している。つまりすでに八歳だ。ハンの時は若いし治したいと思っただが、あれと同様のことをブレイで再現して良いものだろうか。そもそも、毎日クチバシに薬剤を点滴されるなど、おとなしいハンなら良いが、無礼なブレイには耐えられないだろう。いや、それでもひよっとしたらこの腫瘍の切除は可能かもしれない、診せもしないで判断するのもどうだろう・・・しかし患部は首だ。素人考えでも、簡単にいかなのはわかりそうなものだった。

悪性でなければ、大きくもならず大丈夫かもしれない。駄目なものならしかたがない。ブレイはブレイらしく生きて、そして最期を迎えるに違いない。結局そういう判断をして、積極的な治療をはじめから放棄することにした。治療する気もないのに、獣医さんに見ていただくのも失礼な話なので、何があっても病院には行かないことに決心する。

それにしても、二〇〇二年のヘイスケ以来の事態には、何か原因があるのだろうか。食生活なら今さら気にしないしあきらめもつく。しかし以前はもっと不健康だったし、まったく健康的な食事しかしなかったサムなど説明がつかない。証拠は何もないが気にかかることはいくつもあり、中でも最大のものは、二〇〇二年に使用した一部の巣草の刺激臭だ。あれはホルマリンを消毒液に使ったのではないかと思って、とりあえず洗浄してから使用したが、やはり問題があったのではないだろうか。というのも、熱心に巣ごもりするタイプにはかり問題が発生しているように思えるのだ。ヘイスケ、チビ、サム、ハン、そしてブレイ、嫌な気分になる。

ホルマリンは発ガン性も指摘される毒物だが、水洗いすれば普通問題ないと考えられており、そんなに気にしなかった。しかし案外文鳥には、重大であったのかもしれない。そうだとすれば後悔で一杯になるが、もちろん偶然の一致に過ぎないようにも思える。とりあえず、以後気をつけたいところだ。

腫瘍ながら、あいも変わらずメスの尻を追いかけ元気そつなブレイを横目に、悶々としている飼い主などやはり無関係に、セーヤたちの抱卵は問題なく行われ

ていった。

抱卵から一週間弱、検卵をおこなう。マセとガツに委ねたのも含め、六個すべて有精卵。たいしたものだと感激しつつ、全部孵化しても世話しきれないという現実を忘れるわけにはいかない。繁殖期は始まったばかりで、これから長らく望まれたゴンの子ども生まれるかもしれない。また、グリとセーユはいつも無精卵ばかりだったが、今回は違うかもしれない。いろいろ考え、とりあえず今回面倒が見ることが出来るのは二羽までという結論に達する。

本来、ヒナが一羽だけ孵化するのは避けたい。なぜなら、複数のほうが、親鳥を刺激してスムーズに育雛が始まると考えられるからだ。そこで、セーヤが温める卵を二個残すのが妥当なところだが、せっかく独身姉妹ががんばっていたのに、今さら努力を無にするのもかわいそうな気がする。そこで、あえてセーヤの方も一個だけ残してあとは擬卵とかえる。もし育雛出来なくとも、まだ若すぎるくらいだから次があるはず、あわてることはない。

そうこうするうちに、孵化予定日。マセとガツに卵を預けて十六日目となる十月二十八日の朝となった。カゴをのぞくと、前夜から設置したアワ玉入れの中に、バツ印のついた卵の殻が、丁寧に置かれていた。後からマセたちが産む卵と混じらないように、墨で印をつけておいたのだ。夕方にはシイシイと鳴く声も確認できた。七代目が誕生したのだ。



生まれたばかりの7代目

翌日二十九日は、セーヤたちの卵の予定日。実は前夜、隣カゴのキタが間違ってセーヤと抱卵を交代する事件があり(セーヤの夫のクラはなかなか抱卵を交代してくれない。間違ってやってきたキタを夫と間違えたセーヤは喜んで交代してカゴから出てきたのだ)。これを目撃した飼い主は箱巢を開けてキタにお引取

り頂いた）、その時はまだ孵化していなかったが、朝にはシイシイと鳴き声が聞こえてきた。本当に規則正しい。

一羽のヒナを、育雛経験のない親たちがちゃんと育てられるかどうか、非常に懐疑的だったが、セーヤたちの箱巢からは時節、元気な鳴き声が聞こえてきた。一方、マセたちの箱巢は無音で心配したが、確認するたびにヒナは大きくなっていった。おとなしい性格なのだろう。

思い出になる文鳥もいれば、これから思い出を作っていく文鳥もいるというのは、大きく見れば悪いことでもないと考えたことにした。

### 【その三十五】交叉する新旧の生命

さんざん思い知らされているが、実際世の中一寸先もわからない。

セーヤとクラの子ども、七代目のヒナたちは、それぞれ飯の親と実の親のもとで、何の問題もなく大きくなり、人間から餌づけを受けるようになった。きわめて順調。実の親に育てられた白羽の多い『弟』は、うるさいくらいに元気なので『ゲン』、飯の親に育てられた真っ黒い『兄』は、おとなしく閑かなので『カン』と名づけた。「カンゲン！」でも「ゲンカン！」でも続けて呼びやすい。どうせ、しばらくしたらイタズラばかりするに決まっているので、連呼できたほうが楽だ。カンの脚が軽いペロシス（先天的臆はずれによる八行）で心配だったが、決定的なハンデにもならず、十一月二十五日には初飛行、元気一杯に成長していった。

ところが、十一月二十七日、またしても予期しないところから不幸がやってきた。カンの育ての親でもあるマセ、あの初代ヘイスケの娘でゴマ塩三姉妹の長女が箱巢の中で冷たくなっていったのだ。カンの育雛後また産卵を始めていたが、前日までは変わった様子もなく、当日も朝には気がつかなかった。夜の放鳥時間に箱巢をのぞいたのも、産卵していたら擬卵に取り替えようと思ったただけだったので、私は目の前の状況が一瞬理解できなかった。

得難いキャラクターの喪失に、原因を詳しく探る気にもならなかったが、お腹に卵が残っている感触はなく、ただ総排泄口が軽く腫んでいる感じは見て取れた。



やはり一種の産卵障害だろうか。

マセと言えば、この夏、ハンが青色吐息であったとき、なぜかゴンとヤクザの抗争のような、仁義なき闘いを每晚繰り広げ、元氣と言つより、どうかしてしまつたのではないかと、さんざん笑わせてくれたものだった。あの元氣な姿は何だつたのだろうか。

それにしても二〇〇三年は、ひどい一年だった。チビ、サム、ハン、マセ、氣がつけば、我が家の誇る純粋な？ゴマ塩文鳥はガツだけになってしまった。さつさと二〇〇四年になるが良い。と、オマケと同居を始めて、案外幸せそうなガツ（オマケはゴマ塩好きなので大喜び）や、ひとり餌になって、好き勝手に闊歩するカンゲンを見ながら念じていた師走、さらに思わぬ事態が待っていようとは……。

それは十五日の朝だった。いつものようにエサを取り替えていると、例の「シイ・シイ」が聞こえてくるではないか。冗談ではない、寝ぼけた頭にガツンと一撃である。オマケ以来二回目、予想外の検査もれ卵が孵化したに違いない。問題は、近親交配の子でないかどうかだ。何しろ、ブレイとクルの父娘は同居中なのだ。しかし心配は杞憂だった。鳴き声はブレイたちの隣カゴの箱巢から聞こえてくる。ナツとノロの子どもだ。

この夫婦のヒナなら問題ない。当初の目論見では、七代目、次にゴンの仔、さらにグリとセーユの仔、とりあえずナツとノロの仔、と優先順位をつけて、七代目は二羽だったので、ナツとノロは特にあわてなくても良いくらいの感覚だったのだ。むしろ、ナツが一週間以上の間に小さな卵を二個産んだだけという不思議な産卵行動だったので、これは繁殖する気はないものと見なしていたに過ぎない。突然一つ産み足して孵化させたのなら、それも有りだろう。

孵化したばかりのビックリするくらい小さなヒナを見ながら、そんなふうに見まぐるしく考えを整理し、さて、ナツとノロがしっかり育てられるかどうかとなると、また疑惑がわいてきた。ナツは育雛経験があるが、前夫のヘイスケにおんぶにだっこ状態だったし、ノロときたら、それでも当初より多少まともにはなつたが、やはり何を考えているのか頼りないことこの上ない文鳥だ。

まあ、育ててみることにさ、と冷ややかに突き放して見ていると、案外この夫婦もがんばって育雛をした。亭主が今ひとつ頼りないので、ナツが奮闘している様

子が良くわかる。ダメ亭主だと、女房がすっかりするものようだ。

諸般の事情で、いつもより成長した二〇〇四年元旦から餌づけを始めたこのヒナの名前は、『モレ』とした。検査漏れだからだ。モレははじめ餌づけを拒否し、神経質な面を見せたが、親にはあまり似ないで理知的な目つきをしている。よく見ると、右脚の外指が途中から欠けていた。先天的なものとしたら珍しいこともあるものだ。羽以外は真つ黒で小柄、人を見る目つきなどは血のつながりのない初代ヘイスケを思い出させる。そのヘイスケが、孫のクルの指をかじって剥落させてしまったのが、その指というのが同じ右の外指なので、だんだん話は因縁めいてくるような気がした。

さほど望まれずに誕生したのもあれば、待望の新星もついに誕生した。ゴンの子どもだ。

飼い主の頭にある系図では、正統な五代目といえばオマケでなくゴンだ。何しろ名前が五にちなんでつけられている。性格はともかく、外見の美しさは群を抜いているゴンの二世を残そうと、これまで一体どれだけの外れな努力をしてきたことが！まずオスだと思いついてセーユを嫁に迎え、産卵合戦を巻き起こし、続いて婿を迎えたノロは結局邪魔者扱いされ別居、さらに迎えた婿のケイはセーユの強奪愛を招き、ようやくこの繁殖期から、一九八〇円のキタと夫婦らしい生活を始めた。思えば何と長い道のりだったことが。キタときたら顔は頬っぺたが大きいし、頭は悪いし、巢作りも下手だが、とりあえずゴンの夫でいるだけでも感謝すべきだろう。

ゴンの今期初めの産卵は全て無精卵だったが、今までの経過が経過なので特に落胆せず、十二月末に二期目の産卵を終え、抱卵を始めた時も、それほど期待はしていなかった。ただ、ゴンもキタもしっかり交代で抱卵しているのには感心していた。特にキタは抱卵が好きなようだ。オスとしてはなかなか得難いキャラクターと言える。セーユの時と言い、もともと抱卵のヘルパーを望んでいた気配の濃厚なゴンにしてみれば、ありがたい相手なのだろう。この夫婦の努力のかがいがあったようで、検卵すると七個のうち二個が有精卵だった。

すでにカン・ゲン・モレの三羽がいたので、もったいないが、有精卵を一つだけ残すことにした。この際「一羽っ子」を我が家の伝統にしようのも仕方がない。もし育てなければ育てないであきらめて、次からは仮母に出しても良いだ



重量感ただよう孵化 18 日目のオッキ

ろつと考えたのだ。

予定日の十四日に孵化。育雛も問題なくおこない、むしろ順調すぎた育雛の結果、おそろしく重量感をただよわせるようになっていたヒナを、三十日から引き取り餌づけ開始。何とこの時点で二十七gもあつた。このままていくと、ジャンボ文鳥になるかもしれない。それはそれで面白いと思いつつ、『オッキ』と名づけた。たんに、大きいから……。

オッキは飼い主による「大きくなれ、大きくなれ！」の呪文にこたえて、孵化三週間ちよつとで三十二gまで体重を増やした。これは成鳥になれば四十gほかたい、と想像していたら、そこから普通の文鳥にもどつていった。みるみる二十七gまで減つていき安定、ひとり餌後も結局ジャンボ文鳥にはならず、やや大柄のきれいな桜文鳥に成長した。目論見どおり母似だ。ただ、わがままな性格も母似だが……。

カン・ゲン・モレ・オッキの同期生たちは、個性を怪しく輝かしながら、飛んだり跳ねたり良い運動をしている(小突きあいどつき合いをしているとつ見方も出来る)。何とかヘイスケ流のさえずりを伝授しようとしたが、結局オスはゲンだけで、しかも彼はブレイに師事して、その追っかけまで始める始末だ。

そのゲンは、巨体で甘えん坊で間抜けで、さらに他の三羽がヒナ換羽が終わつて美しい桜文鳥に変身しても、ヒナ毛を残す迷彩色であり続け樂しませてくれた。メスの三羽はライバル関係にあるよつで、特にオッキはモレを目の敵にし、フライングボディアタック、フライングニードロップといった空中殺法をくりだす。このオッキは、我が家には珍しいベタバタの手乗り文鳥だ。手を出すと遠くからでも飛んで来る。

将来的には、ゲンとオッキを夫婦にして、さらに新しい世代を拓いていつてもらおうと考えている。この二羽は片イトコの関係だから(オッキとゲンの母せー

ヤがイトコくわりに血縁は遠く、うまくいけばオマケ系とゴロン系を統一できる。  
明るい未来であって欲しいなあと願う。

うっく